

2025年度 東広島市教育委員会主催・広島大学マスタース共催市民講座

「小学生のための実践的な将棋講座」

広島大学マスタース会員 早瀬 光司
(日本将棋連盟五段)

開催日時：2025年7月31日(木)・8月1日(金)・7日(木)・8日(金) 13:30~15:00

開催場所：市民文化センター・研修室3

参加者：小学生10名

[1] 目的

将棋の未知の局面において、どのような手を指したらよいのか、それを自分自身で考え出す訓練を続けることによって、誰でも、自分の日常生活に出会う未知の場面において、自分で考え、その為すべきことを考え出せるようになる、そういう実力(実践力)を育てることを趣旨とする。

[2] 将棋は、礼に始まり、礼に終わる。

人が誰かと将棋を指すとき、その対局相手は決して敵ではありません。対局者と一緒に、その将棋を創り、楽しみ、互いに生長を期すことのできる、良き仲間であり同朋である。

[3] 上記[1]と[2]を伝え、これを念頭に置いて、本講座を開講・実施しました。

第1回 7月31日(木)： 当日出席の八名の受講生の棋力を知るために、受講生は全ての駒を盤面に配置し、講師は自分の駒のうち、飛車、角行、銀将2枚、桂馬2枚、香車2枚の計8枚の駒を盤面から除外して(これを「八枚落ち対局」と呼びます)、王将、金将2枚、歩9枚の駒のみで指導対局を行いました。講師が各受講生を相手に順に指して回り廻って八名全員と同時的に対局(これを「8面指し」と呼びます)を行い、その結果、勝った受講生は五名で、負けが三名でした。

第2回 8月1日(金)： 当日の出席者十名の受講生のうち、前日に勝利した五名は六枚落ちに、他の五名は八枚落ちに設定して指導対局を行い、六枚落ちの五名のうち四名は勝ち、一名は負け、八枚落ちの五名は全員が「指導付の勝ち(指導がなければ負け)」というものでした。

八枚落ち対局の五名は駒の動かし方は知っているものの、具体的にどのような方針で指したらよいのか分からないようでした。そこで、講師は指導対局の最中に、受講生の指した「手」を元に戻して、「ここで、どう指したらよいのか、自分で考えてみよう」と言って、受講生が指す手を待ちます。講師の方から最善手は教えないことにしています。そして、受講生が考えて「或る手」を指した時、それが最善手でなかったときは、これは「75点」とか、「40点」とか言って、「100点の手があるので、それを自分で見つけ出してみよう」と言って、再び受講生の指す手を待ちます。受講生は何度か試行錯誤を繰り返すうちに最善手を指してきます。そのとき、講師は「はい、よくできました」と言って共感したのち、どうしてその手が100点なのかを、盤面の駒を動かしながら受講生に説明します。このような手続きを講師の玉が詰むまで続けるので、最終的には受講生が勝つこととなりますが、これは「指導付きの勝ち」と言い、指導がなければ敗けていた訳です。「八枚落ち対局」の初心者相手に指導する時には、勝つ喜びを味わってもらって次回に繋げることが大切です。

第3回 8月7日(木): 当日の出席者九名のうち、前日に勝利した四名は五枚落ちに、一名は再び六枚落ちで、他の四名は八枚落ちに設定して指導対局を行いました。五枚落ち・六枚落ちの五名は全員が勝ち、八枚落ちの四名は全員が「指導付の勝ち(指導がなければ負け)」でした。

八枚落ち対局の四名については、講師が途中で「手」を戻して、「ここで、どう指したらよいか、自分で考えてみよう」という8月1日と同様の指導を続けました。そうしないと、四名ともどこでどう指したらよいか自分で見つけ出すことができないので、そのような指導を行いました。

なお、或る程度以上の棋力の者同士の対局では、通常、終局した後に対局時の或る局面に戻して、「ここで、こう指していたら、・・・・・・」というような感想戦を行うのですが、八枚落ち受講生の場合には、終局後に「前の局面」に戻しても、そのような局面があったことを覚えていないので、意味を成しません。そのため、対局の途中で「手」を戻して(中断して)考えてもらう必要があるのです。

なお、八枚落ち対局の四名に対しては、「明日(8月8日)は、最後なので、講師から教わることなく、勝てるように頑張りましょう」と言って、励ましてみました。

第4回 8月8日(金): 当日の出席者七名のうち、三名は四枚落ち、一名は五枚落ち、三名は八枚落ちに設定して指導対局を行いました。四枚落ちの二名は勝ち一名は負け、五枚落ちの一名は負け、八枚落ちの三名は全員が講師から教わることなく勝つことができました。

八枚落ちの三名に対しては勿論、指し手を教えることはせず、ただ、重要な局面では、「良く考えてください」と言うだけに留めました。そうしましたところ、なんとか三名全員が自力で勝つことができ、「有終の美(?)」を飾ることができたので、みな嬉しそうでした。

四枚落ちや五枚落ちまで進んだ五名は、スマホを使用して「将棋ウォーズ」で対戦して力を付けてきたようでした。なお、四枚落ち対局に勝った二名(全日4勝0敗でした)には、「次に対戦する時があったら、三枚落ちで対局しましょう」と言って、励ましつつそれを互いの楽しみと致しました。

<総括> 駒の動かし方は知っているが、どういう方針で指したらよいか分からないという初心者に対して、上達してもらうことの難しさを、あらためて実感する機会になりました。初心者レベルを越えて、講師に対して四枚落ちで勝てるくらいにまで上達してもらえれば、その後も将棋を指し続ける可能性が高くなります。そのためには、どうしたらよいか、試行錯誤の真最中です。

なお、『「自分で考え出す」ことを育む』ことは難しいテーマではありますが、大きなテーマであり人類にとって重要で必須な要素・要件です。「将棋を指す」ということは、「人生の縮図」にも成っているので、このテーマに大きく貢献できる、有力な方法であると考えています。

本講座の最終目的は、各受講生が将棋を指すことを通じて、「自分で考え出す」実力を身につけることです。受講生の各自が今後の長い人生における様々な場面・局面において、緻密・繊細に、時には、大胆に考えられるようになって、楽しく・心豊かに、生きていけるようになることが本講座の真の目的です。 元気